

ひとと空間を科学する

topic

1

2021年度の大学院修了生がJIA優秀賞を受賞！

name

2021年度卒業 修士2年 宮研究室

森 菜央 さん

title

空間構成による経験と想起
ぼーっとできる建築

Comment

自粛生活で家に長くいる体験をしたときに、ぼーっとしたいという思いがあった。自然を前にしたときと違って、私が家の中でぼーっとできなかったのは何故だろうか。ぼーっとするとき、人は意識が現実から少し離れ、自由な想起や想像を広げていると考える。窓のからの景色から自由な想起が生まれるとは限らない。建築の中で、“今、ここ”という感覚から、建築という私の周りに広がる世界を自由に想起できる状況にあることが、ぼーっとできる体験を生むと考えた。そのためには、建築の中で「連続した経験の蓄積」と「想起/想像の余地があること」が必要だという仮説をたて、研究、提案につなげた。

第20回JIA関東甲信越支部 大学院修士設計展2022
優秀賞公益財団法人 隈研吾建築奨学財団
奨学生に選出2022年度奨学生に
修士課程1年次尾崎美都さんが選出されました

2021年2月、建築家の隈研吾氏が、建築学を専攻する国内の大学院生を対象に、返済義務のない奨学金を支給する公益財団法人隈研吾建築奨学財団を設立しました。

その奨学生に今年度修士課程1年の尾崎美都さんが見事選出されました。

昨年に引き続き、日本女子大学からは2人目の選出となります。

2021年度隈研吾建築奨学財団奨学生一期生
修士2年宮晶子研究室 江崎有咲

奨学生としての1年

財団では修士1年生の頃から、隈研吾さんをはじめ様々な建築家の方々の前で修士制作を発表する機会をいただき、とても勉強になりました。まだ修士制作の構想段階から、自分の思考を人に伝える言葉にして発表することはとても難しかったですが、修士制作のテーマを深掘りしていく上で大きな糧となりました。

また奨学生は意匠、歴史、技術など様々な建築の分野の人がいるため学ぶことが多く、こうした学外の学生と交流できたことはとても貴重な経験でした。さらに一期生では、財団の場以外でも積極的に交流しており、学びに対して主体的に動く人が多くとても刺激になっています。来年の春には最後の修士制作の発表があるので、残りの大学院生活も頑張りたいと思います。

topic

2

2022年度 ハウジングワークショップが行われました



毎年、台湾の大学と共同で行われているハウジングワークショップですが新型コロナウイルスの影響から今年は日本女子大学のみの参加で行われました。11人の学生が参加し、沖縄の栄町市場を敷地とし様々な提案をおこないました。

テーマは「新しい栄のかたちを求めて：多様性と共存共 Re-Imagining Saka: Diversity and Co-Prosperity」とし、現地でのフィールドワークを行い、そこで感じたことや集めた情報をもとに大学に戻りデザインワークをすすめ、様々な設計提案を行いました。

課題内容

「混沌」という言葉は、モダニズムにおいては良からぬものとして捉えられ、近代都市の整理整然とした空間から排除されようとした。但し、こうした空間、形態操作やコントロールが建築に限らず都市でさえも均一化し、特徴のないどこにでもあるような空間を作ってしまったことも事実である。衛生改善の反面で我々は住まいや都市、コミュニティーに求める活気や賑わいを失ってしまったのである。混沌という現象を言い換えると、それは多様性と共存共栄がもたらすエネルギーな状態を指すのである。街路、市場、居住空間などの場は、人々の様々な行動や行為を甘受し、自由な使われ方や物象の解釈を可能にする。それらの要素が重なり合い、多元的に起こり、時間軸を通して刻々と変化する関係性の場を通し、レジリエントで且つ活気に溢れるコミュニティーを形成すると考える。変化の反対は汎化であって、時代の潮流に逆行するものだと捉える。変化を理解し、戦略的に設計やデザインに反映しようではないか。栄町市場には、そういった街路、市場、居住空間が共存し、変化に富んだ場である。但し、老朽化や世代交代、異文化の交流、変化している市場構成、パンデミックなど、多くの課題を抱えつつ、次のステップへの変貌を遂げる過渡期でもありと考える。歴史的な市場と住まいとしての営み、そして実地調査で垣間見える現状を記述し、これからの栄町、那覇、または日本にとって必要な多様性と共存共栄のかたちを想像する機会と捉える。分析、実地調査などを通して学んだ、残すべき要素と、これからの時代のために必要な提案とを織り交ぜて、栄町市場の街路、市場、居住空間を含めた画期的な未来像を鮮明に描いてもらいたい。

